

自転車の語乗物

cyclist's stories

で真波がマシントラブルにより残り四〇〇メートル地点

た。輝くみたいにきれいな景

かった」

から」

そうした人柄が認められての、主将就任だった。主将となっても、レースにおける役回りは変わらない。レギュラーとして出走する場合でも、山でのアシストがその主な役割だ。華々しい結果を自らが手にすることはほぼない。だが状況を見極めて対応する臨機応変な判断力と、モチベーターとしてのマネージメント力は、しばしば□□大に好成績をもたらした。

だからこそ今大会、□□大自転車部は一致団結し、彼らの主将を表彰台の高みに押し上げたのだ。

手にしたのは、あの日の忘れもの。

秋の気配の近づく栃木県、いろは坂ヒルクライム。男子エリートの部では、□□大四年手嶋純太(22)が優勝。大学四年間の有終の美を飾った。

「ええ、もちろん！ だってオレは、自転車が好きですから」



「凡人主将」が表彰台に立った日。

インカレは裏方。チームメイトを支え続けた主将が初めて手にした、ささやかで大きな栄冠——。いろは坂ヒルクライムで初優勝した手嶋純太(□□大四年)に、優勝の感想と当地に寄せる想いを聞いた。(取材・文 当誌編集長)

「チームのみんなが、勝たせてくれました」表彰台をゆっくりと降りた手嶋は、感無量の面持ちで語った。中学で自転車競技を始め、高校、大学と自転車一筋。個人として表彰台の頂点に立ったのは、これが初めての経験だ。「表彰台の一番上、最高の眺めでした」優勝者に贈られる花束を抱きしめた努力家の主将の目には、涙が光っていた。

「ええ、もちろん！ だってオレは、自転車が好きですから」